金沢港大野地区で

うみの現場見学会 開催

学生ら 17 人が参加！海洋土木のスケールの大きさと魅力体感

日本埋立浚渫協会は8月5日、第31回「うみの現場見学会」を金沢市の金沢港大野地区で開きました。金沢大学と金沢工業大学でインフラや工学について学び、研究している大学生、大学院生ら17人を招き、ポンプ浚渫の現場周辺を案内。海洋土木のスケールの大きさや社会に貢献する港湾インフラ整備のやりがいなどを知ってもらう機会としました。初めて船上から海の現場を見学する学生も多く、普段の講義とは異なる貴重な経験ができたようです。

石川県最大の港である金沢港は1970年に開港し、大浜ふ頭や石油ふ頭、大野ふ頭などで構成されています。背後地域の基幹産業の経済活動を支える物流拠点として重要な役割を担うとともに、2020年には無量寺ふ頭で「金沢港クルーズターミナル」が完成し、観光交流拠点としても発展を続けています。

今回、見学会を開催したのは国土交通省北陸地方整備局が発注し、五洋建設・みらい建設工業JVが施工する「金沢港（大野地区）航路（−13m）浚渫工事」（工期2025年5月28日～11月14日）の現場です。船舶の運航や停泊の安全を確保するのが目的で、水深13mを保つため、幅150m、延長220mの範囲で海底を浚渫します。金沢港での「うみの現場見学会」は2006年以来、19年ぶりの開催となりました。

見学会に先立ち、現場の説明を石川県地場産業振興センターで実施しました。日本埋立浚渫協会の山下朋之企画広報委員長は「ポンプ浚渫工事は最近、国内では珍しく、貴重な機会です。日本海側の物流拠点やクルーズ拠点として発展を続ける金沢港の港湾機能強化のプロセス、海洋土木技術をご覧いただきます」と話しました。続いて金沢港湾・空港整備事務所の渡邉理之所長が金沢港で取り組んでいる事業の概要などを説明。五洋JVの伊豆友貴現場代理人が海底の土砂掘削から吸入、排送までの作業工程を詳しく解説しました。

その後、学生らは船に乗り込み約1時間、海の現場の様子を見学しました。船上で工事担当者から説明を受けながら、工事で使われるポンプ浚渫船や排砂管を間近で臨み、海上工事ならではの迫力を肌で感じました。

下船後、学生からは「海底地盤はどれほど固いんですか」「浚渫した土砂はどのように活用されるのですか」といった質問が寄せられ、うみの見学会を開催する意義を協会として実感することができる日となりました。

金沢港の位置図

見学に先立ち行われた工事説明

海底に堆積した土砂を排出する排砂管

船内から工事の様子を見学